Weekly News　龍ケ崎中央ロータリークラブ

2012.03.16　No.00694　R I District 2820 CLUB 50504

会　長：城出鴻二郎　幹　事：横澤啓二　連絡先：TEL 0297-66-3258 FAX 0297-66-3280 http://rcrc.web5.jp

事務所：〒301-0032 茨城県龍ケ崎市松葉 5-12-6　例会場：〒301-0857 茨城県龍ケ崎市泉町 1592-77（ザ･ゴルフクラブ竜ケ崎）

Reach Within to Embrace Humanity

本日のプログラム

【PETS 報告 03.16】
「長友会長 E」
クラブ役員

次回のプログラム

【会員卓話 03.23】
「海老原会員」
職業奉仕委員会

３月の主な行事：識字率向上月間　３月 13 日:世界ローターアクトの日（週間）

第 693 回例会報告

点　　鐘:城出鴻二郎会長
国　　歌:君が代　ロータリーソング:奉仕の理想
ゲ　ス　ト:なし
ビ ジ タ ー:なし

会長報告：城出鴻二郎

■本日は山口さんの宅話をいただきます。久しぶりに山口節を拝聴いたしましょう、よろしくお願いいたします。

■ドリームツリーの企画がいよいよ最終場面にあります。募集状況も思いのほか低調とか、３月 24.25 日に開催されます。皆さんご参加願います。

■GES の第７分区の歓迎会が水海道 RC 主催で３月 28 日午後６時より幸寿司さんで開かれます。会長幹事は出席とかですが、時間があればご参加を歓迎いたします。GSE スケジュールを配布いたします。よろしくご協力のほどお願いいたします。直前で変更が出ることも想定しています。

■地区情報です。

東日本大震災遺児奨学金に関して、地区から状阿呆と言うより、参加するので支援願いますとの連絡が来ています。昨年如何なもか、と言うような話題になりました、5for1 プログラムの新しい展開と言うことのようですが、要するに日本ガバナー会の勇み足と言うか、大いなる勘違いの結果と言うことですが、一部のパストガバナー諸氏がどうしても奨学金をやりたくて「ロータリー希望の風奨学金」と名称を変えて進んでいます。とりあえず大風呂敷は畳み込んだようですが、1700 人の震災遺児に毎月５万円と言うような趣旨で、始まっています。現在の基金は４億５千万程度とか、本当に 1700 人とすれば、５ヶ月でパンクするシステムになっています。

そして、このプログラムに大木ガバナーは積極的に地区として参加する事とし、会員１人当たり 1000 円以上の寄付を求めています。計画自体は否定しませんが、分相応に冷静に出来ることを慎重に計画し実行すべきと考えます。

取り扱いは、理事会等で検討いたしますが、多方面の情報を検索しておいてください。

■来週 13 日は水戸 RC さんの６０周年式典です。

幹事報告：横澤啓二

■牛久ロータリーさん３月 19 日例会は定款第６条第１節によって休会になります。

■社会福祉大会が 10 日に開かれます。時間があれば覗いてください。

雑誌委員会報告

ロータリーの友ご紹介

例会一覧表が付録になっています、ぜひメークアップの参考にしてください。

切り取って使用するようになっています。

持続可能な奉仕を横 1P・・・RI 会長の指定記事ですが、従来のロータリーでは持続するプロジェクトは敬遠するように指導していましたが、プロジェクトの中には継続、持続しなければ効果や機能が維持できないものもありますから、何をいまさらと言う気がしますが、自立支援の観点も含めて当たり前のことですが難しい問題ではあります。

基本的教育と識字率向上　横 8-9P　本来的な識字率と教育者の養成がようやく表現としてかかれるようになりました。日本人の常識では教師は当然資格や養成機関等によって確立していますが、開発途上

の国は教育者、制度の形が整っていないのです。昔の日本の師範学校が良かったかどうかはわかりませんが、教育の質は教師の質と言うことで、その教育者の質がゆとり教育の結果、崩壊は言い過ぎかもしれませんが、困った状況にありますが、世界的には深刻な問題ではあります。

東日本大震災心は共に 22-27P　水曜日商用で久しぶりに仙台に行きましたが、角田市から仙台までの１時間国道沿いの見えるところは復旧が進んでいましたが、まだまだのようで、福島だけが取り残されつつあるような気がいたしました。

横 33P　奉仕を通じて平和を・田中作次次期 RI 会長記事です。３つの重点目標と言うことで、それが何か知っておいてください。**クラブのサポートと強化、自動的奉仕の重点化と増加、公共イメージと認知度の向上**と言うことですが、最後の目標はあってもなくてもの感がありますが、・・・色々と書いてあります。

おまけの冗談かと思わせる文章が 37P にあります。笑ってしまうのは私だけなのでしょうか。**恥ずかしくて会報には載せないでください**。その裏の 38P には青森のガバナーの怨み節ならぬ、どうにもならない青森の状況とか、ロータリーのお話ではないような気がいたします。

お勧めは 40-44P の同論異論・今回は広報は必要か否か・一度幹事さんに整理をお願いしたいと思っていますが、

50-53P ロータリーの綱領の和訳・なんか色々と書いてあります。読む元気のある方は読んで教えてください。私個人的には何でもかまいません。たいした問題ではありません。なぜなら、どちらにしても、皆さんのロータリーライフにどのような影響があるのでしょうか。意味が修正されるとロータリーをやめるのとかのお話なるのでしょうか。単なるお遊びですから、好きに考えてもらってかまいません。自分自身の理解のしかたの問題ですから、・・・

但し、新バージョンは気に入りません。特に第４はいけません。私はですが、・・・

縦書きは毎度のことで今回は松下幸之助さんのお話ですが、我々世代は何とか松下幸之助さんの生を知っているのですが、この川越さんも当時は松下会長さんですから、実際はもう少し先輩世代の社員の語り草がありました。今から 40 年前、ナショナルの換気扇工場の当時課長さんクラスは相談役と言う表現で松下幸之助さんを尊敬と言うか、羨望と言うか、指導された経験と言うか、一種独特の感慨、憧憬を持ってお話が出たものでした。色々な場面で相談役の話題を話すことを心地よく感じていた社員が多数いたようです。日本の多くの一時代をくした優良企業も時代の波には翻弄されています。

本日のプログラム

ロータリー活動への思い

元会員　山口洋一

■久し振りに前所属のロータリークラブ例会に参加し、卓話の任に当たった。私は 2 年前まで専門職として地域のロータリークラブに所属していた。母の介護を理由にクラブに退会届を出し、約２年強、ロータリー活動から身を引いていた。今でもそのことは変わってはいないが、地域のロータリー活動も様変わりしてきたようにも感じた。

■20 人規模の小集団ではあるが、実際に活動している会員は 10 名弱になっている。ロータリーの専門家だけが残ったとも言えよう。今日の例会も私を含めて 8 名の参加者であった。この私を除く７名とも会長経験者で、今年度の会長・城出氏は 2 回目の会長職である。古参の会長経験者である川北氏は、このところ出席していないとのことであった。設立 15 年総会を数年後に控えたクラブで、会員の不定着は危機的課題になっていると感じた。退会を許していただいた私だが。

■いつものように城出会長の点鐘で始まった。「手に手つないで」が本日のロータリーソングであった。会長報告も会のセレモニーとしては欠かせないものであり、城出会長から会長報告がなされた。彼は会長報告に続きいつの間にか雑誌委員会報告も兼ねて始まった。これには驚いた。司会進行もなく会長報告と雑誌委員会報告が一緒になっていたからである。ここから会の運営に軋みが始まるのではないかと感じる一幕であった。しかし、このことの重要性を何人の参加会員が感じたであろうか。

■次いで幹事報告が横澤幹事からなされ、国際奉仕委員会報告が川上委員長からなされた。ここまでが一連の例会行事でもある。横澤プログラム委員長から本日のプログラムが紹介され、元会員である私が壇上に上った。私は退会後の 2 年間にわたる生活の在り様を簡単に説明し、94 歳の母親の終末介護との取組み、3.11 東日本大震災の際の母親との対話、退

会後に新たに参加した活動等について紹介し、ロータリーについての思いを語った。
■ロータリーを離れて直ぐ対応した団体は大学のOB会であり、次いで対応したのは故郷県人会であった。何れも初めての参加で、これまでの誘いには目も向けなかった活動でもあった。定常的に仕事として対応している学術団体で学んだ会の運営の難しさも私なりの視点で紹介し、最後にロータリークラブの在り様を私見として述べさせてもらった。詳細を掲載することは避けるが、退会防止というテーマは何れの団体においても共通の課題であることを、例を交えて発表した。
■例会内においては、「6年間余のロータリー活動後の社会参加について」と題したレポートを提出させていただいた。そこから、以下の内容を抜粋させていただく。
＜学術団体の場合＞
　会員減少の要因の最も大きな事項は、企業会員の減少である。企業会員であることのメリットは何か、先輩会員はその企業でどのような立場に置かれているか（後輩たちからの目）、先輩会員が新入社員にどのような接触を行っているか、企業は会員を支援する体制になっているのか（実はこのことが最も大きな変化である。これまでは企業が大会参加、学会活動への経済的支援等を行ってきた）、等々である。
＜ロータリーの場合＞
　最後に、私はこの間、「奉仕の一世紀―国際ロータリー物語―」を最初から最後まですべて読み終えました。そこで感じたことは、ロータリーの哲学は初期の時代に出来上がり、それ以降の活動は維持管理に明け暮れる毎日であったことです。登山にたとえるならば、早い時点で山に登りつめ、頂上で景色を眺め、さあ、下山しようと思い下山の体勢に入った。頂上で眺めた景色に酔いしれて、下山の哲学を学習していなかった。下山がこれほどまでに辛いものだったとは思ってもいなかった。その辛さに耐えられない学習不足の仲間がこぼれ落ちて行く。
◆実はこの現象は学会活動等にも当てはまるものと考えます。戦後の日本の姿を映し出しています。ロータリーの哲学ともいえる「寛容」「慈悲」「利他」の考えも、ロータリアンが共有しているとは信じがたくなりました。
◆そして、100周年記念誌にある「奉仕の一世紀」の「奉仕」とはも、ロータリアンがその概念を共有しなければなりません。やはり「奉仕」は奉仕なのです。奉仕という行為のベースにロータリーの哲学があることは当然です。これが私の理解です。
と締めくくっている。
　今日の例会参加は、私にとってとても大切なひと時でした。勝手な言い草になったかもしれません。ご寛容を。城出会長、批判めいた言葉を使いました。お許しを。ロータリーで学んだことは今後の実践の場で生かしていきます。貴重な時間を与えてくださり、感謝しております。

本日出席状況

会員	20 名	出席率	55.00 %
出席者	8 名		
出席免除者	2 名	Make-up	3 名
(定款第9条3節a)	1 名	米島、小林、椎塚会員	

ニコニコボックス　（目標額 600,000 円）

本日 4 件 11,000 円（本年度累計 338,000 円）

山口さま：久し振りに皆様にお会いできて幸せです。毎週会報も送信頂き感謝しています
海老原会員：山口さん本日は宜しくお願いします。
城出会員：春なのにまだ寒い日がつづきます。カゼをひまぬように。
横山会員：山口さん。今日は宜しくお願いします。

ロータリー豆知識

《 決議 23-34 》

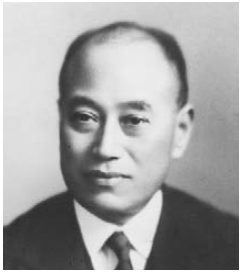
（亀尾会員）

　1923年ごろにはロータリーの内部で、社会奉仕の方針について個人の奉仕か、クラブとしての奉仕か、理論派と実行派との間に激しい対立が生じ、ロータリー分裂の危機を招くに至ったが、１９２３年のセント・ルイス大会の決議23-34 が採択されて、このことにより危機を乗り越え、今日のロータリーを築いた。自己のために利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に常に起こる争いを和解させようとする人生の哲学である。以下は手続要覧をご覧ください。
1959-60 年ＲＩ会長のハロルド・トーマス氏は「ロータリーの歴史を考察すると、23-34 を採択したときロータリーは青年に達した」と記しています

例会の欠席は、水曜日 AM:10:00 までに川上副SAA　TEL 090-3497-0383 に連絡して下さい。

日本のロータリーの先駆者

米山　梅吉（よねやま うめきち）（1868～1946）



日本のロータリーの創始者。1918年の渡米中、ダラスロータリークラブ会員の福島喜三次の紹介により、ロータリークラブと出合いました。帰国後の1920年10月、米山梅吉は東京ＲＣを創立し会長に就任しました。これが、日本のロータリークラブの第一歩となりました。1926－27年度には日本人初のＲＩ理事に就任。1928－31年度第70地区（当時）ガバナーを務めています。

芝　染太郎（しば そめたろう）（1870～1949）

日本のロータリー史上最悪の受難期とされる1938～40（昭和13～15）年代に、日本のロータリークラブの「専任幹事」を務めた人。愛媛県の吉田出身で、東京ＲＣ会員。「英語の達人」であり、昭和初期には『Japan Times』の社長でもありました。

1939年6月には、全権を委任され、一人アメリカのクリーブランド国際大会に出席。得意の英語を駆使して、日本ロータリーの生き残りを賭け「日満ロータリー連合会」を誕生させたことで、知られています。

福島喜三次（ふくしま きさじ）（1881～1946）

日本人第1号のロータリアン。米山梅吉とともに日本にロータリークラブを創設した人。佐賀県の有田出身。

三井物産に勤め、1905年渡米、1915年にダラスＲＣに入会。1920年帰国し東京ＲＣ創立会員になったものの、大阪転勤により1923年、大阪ＲＣ創立会員ともなりました。この年に関東大震災が発生、彼はクラブ幹事として、世界の各クラブからの救援物資を東京へ輸送するなど、大活躍しました。大変誠実な人として知られ、座右の銘は「利他即自利」。＊「喜三次」の読みには「きそじ」「きさじ」の2説があります。所属の東京ＲＣ会員名簿などの公式書類には常にローマ字で「Kisoji」とあるのですが、ご遺族によれば「きさじ」が正しいとのこと、また子どものころ福島氏は地元では「きそっしゃん」と呼ばれていたと言われ、今となってはどちらが正しいのか、確定できません。よって本誌では今回、二説を提示するにとどめます。

手島　知健（てしま ともたけ）（1885～1968）

1952－54年度ＲＩ理事（日本人で3人目）。東京ＲＣ会員。1949年、東京ＲＣが戦後国際ロータリーに復帰したときの、1949－51年度第60区（当時は日本全土で1地区を形成）のガバナー。

あふれる国際性と洗練された物腰をもつ彼は、戦後、日本ロータリーが再出発したときの、大きなけん引役となりました。かつて、ＲＩの日本語翻訳決定権は彼に委譲されており、「四つのテスト（The Four-Way Test)」の翻訳をとりまとめ、定訳をつけたことでも知られています。

東ヶ崎　潔（とうがさき きよし）（1895～1992）

日本から出た初のＲＩ会長（1968－69年度）。会長時のテーマは「参加し敢行しよう！（PARTICIPATE！）」。このテーマは、ＲＩ史上、最も短いテーマとして知られています。

1949年、東京ＲＣに入会。1957－58年度第355地区ガバナー、1963－64年度ＲＩ理事。

アメリカ・サンフランシスコ生まれの彼は、戦後ロータリーの先達者・芝染太郎と同じく、『Japan Times』の社長を務めました。国際基督教大学の創立者の一人でもあります。「ジョージ」という名で、世界中のロータリアンに親しまれました。

向笠　廣次（むかさ ひろじ）（1912～1992）

日本から出た2人目のＲＩ会長（1982－83年度）。国際的にも著名な精神科医でした。テーマは「人類はひとつ　世界中に友情の橋をかけよう（MANKIND IS ONE Build Bridges of Friendship Throughout the World）」。

1982年、ボカラトン国際協議会で「人類は疑いもなくひとつの家族です。さあ、皆さん、左右にいるオジサンやイトコと初対面のあいさつをしてください」と述べたのは有名です。1967－68年度第370地区ガバナー、1978－80年度ＲＩ理事などを歴任しました。生まれは福岡県の久留米市で、大分県・中津ＲＣ会員。（友より）